# 白俗論考

花房英樹

## 一

北宋から明清を經て、現代に及ぶ文學評論の諸書の中に、「白俗」という語が散見し、これをめぐってさまざまな意見が派生し、時に論議にまで發展しつつ、互に錯綜してきた。もともとこの語は、「元輕」の語とともに用いられ、元稹の文學は「輕」であり、白居易のそれは「俗」である、と批判するものであつた。北宋末の許顗が、その「彥周詩話」で、

東坡「祭柳子玉文」、「郊寒島瘦、元輕白俗。」此語具眼。客見詰曰、「子盛稱白樂天・孟東野詩、又愛元微之詩、而取此語、何也。」僕曰、「論道當嚴、取人當恕。此八字、東坡論道之語也。」

と述べたことから始まる。蘇軾が孟郊・賈島・元稹・白居易の詩歌を、詩歌そのものの正統的な理念から論評したものと、許顗は觀じていたのである。ただし詩歌については、許顗も白居易を始めとして、諸人の作を深く賞愛していたのである。このことは、蘇軾も相い似ていたと察せられる。白居易について見れば、清の馬位は「秋窗隨筆」で、許顗の發言を掲げ、ひきつづいて、

然東坡詩、鎔化樂天語及用樂天事甚多。

と言い、蘇軾の詩句を引きながら、

雖作此論、終不免踐樂天之迹。

と結んでいた。そもそも蘇軾において、この語はどのような立場から出されたのであろうか。

「東坡集」を繙とけば、卷三十五に「柳子玉を祭る文」が見える。それは、

倚歟子玉、南國之秀。甚敏而文、聲發自幼。從横武庫、炳蔚文囿。獨以詩鳴、天錫雄味。元輕白俗、郊寒島瘦。嘹然一吟、衆作卑陋。

と始められる。柳子玉の詩歌の、格調の高さに比すれば、元稹・白居易・孟郊・賈島の諸作は、すべて品低きものとなる、という。「白俗」とは、子玉の詩歌をせり上げる文脈の中に置かれた語であつた。蘇軾にとつて、柳子玉は讃えるに足る才能であつたのである。「蘇文忠公詩」（編註集成）には、柳子玉に關する詩歌が、しばしば見える。

次韻柳子玉見寄（卷六）

和柳子玉過陳絕糧次韻二首（卷六）

次韻柳子玉二首（巻七）
和柳子玉喜雪次韻仍呈王述古（巻一一）
觀子玉郎中草聖（巻一一）
雪後至臨平與柳子玉同至僧舍見陳尉烈（巻一一）
同柳子玉遊鶴林招隱醉歸呈景純（巻一一）
柳子玉亦和因以送之兼寄其兄子璋道人（巻一一）
子玉家宴用前韻見寄復答之（巻一一）
柳子玉以詩見邀同刁丈遊金山（巻一一）
金山寺與柳子玉飲大醉臥寶覺禪榻夜分醒書其壁（巻一一）
送柳子玉赴靈山（巻一一）

などである。これらの諸作には、子玉の筆跡とともに、詩歌の見事さに言及する文字がある。「子玉の家の宴に」の詩では、子玉を「太白」になぞらえ、「金山寺にて柳子玉と飲む」では、「詩翁　氣は雄拔」ともいう。高い氣格をもつ詩人と讃えるのである。蘇軾の弟である轍の、その「欒城集」にも、柳子玉についての詩文がある。「柳子玉の壽春に官を謫さるるに次韻す」（巻三）では、「草聖詩豪並びに神速」と歌い、「柳子玉郎中の挽詞」（巻六）には「新詩の錦繡　爛として編を成せり」という句もあつた。蘇軾・蘇轍にとつて、柳子玉は進んで詩歌を贈答し、文學的交渉を重ねるに足る詩人であつた。

この柳子玉は、蘇軾の「破琴」（巻三三）の詩の序における、

子玉名瑾、善作詩及行草書。

の語によれば、子玉は字であり、名は瑾である。この柳瑾という名は、同時代の詩人の諸作にも見える。たとえば梅聖俞の「宛陵先生集」（巻二二）を顧みれば、

送柳祕丞大名知錄
還柳瑾祕丞詩編

があり、後者で梅聖俞は、

吾友蘇子美　聞昔許君詩

と歌い起す。蘇舜欽も子玉の諸作を重んじていたのである。それらの作品は、今は佚して存しないが、斷片は見ることができる。王安石の「臨川集」に、慶曆二年三月、ともに進士に擧げられて間もないころ、柳瑾と贈答した

次韻酬子玉同年（巻二一）
呈柳子玉同年（巻二二）

が載せられ、前者の題下の原注に、

過盡金湯知帝策　見求貂虎識軍儀
男兒本有四方志　秖在蓬瀛恐不知

という、柳瑾の七律の後半が錄せられているのが、一例となる。その才能を確めるすべもないが、當時においては、一應の評價を得ていたのであろう。

しかしながら、蘇軾が柳瑾と贈答を重ね、「柳子玉を祭る文」で、その詩歌を讃えたのは、ただその才能のためのみではない。軾のあの「祭文」には、

嗟我後來、匪友惟媾。子有令子、將大子後。頎然二孫、則謂我舅。

ともある。蘇軾と柳瑾とは姻戚であった。瑾の孫が、軾を母の兄弟と呼ぶ關係である。「東坡集」の「後集」（巻六一）に、「柳仲遠を祭る文」

と「亡妹の德化縣君を祭る文」が收められているが、その後者には、

嗚呼宮傅之孫、十有六人。契闊死生、四人僅存。維我令妹、慈孝溫文。

という文字がある。「德化縣君」の稱號をもつ、柳仲遠子文の夫人は、實は太子太傅を後贈されていた、蘇軾の祖父である蘇序の孫であり、しかも軾よりも年下であった。蘇氏一族において、軾と「德化縣君」とは、兄妹の間柄である。しかも「欒城集」の「伯父墓表」(卷五)の、

季女適宣德郎柳子文。

という語によれば、「德化縣君」は、軾の伯父である蘇渙の娘であり、軾にとっては堂妹である。この女いとこの夫である柳仲遠こそ、ほかならぬ柳瑾の子であった。柳瑾は蘇軾にとって、いとこの夫の、その父であった。あの「金山寺にて柳子玉と飲む」を始めとして、時に應じて柳瑾を「詩翁」と呼ぶのも、詩人としての敬意とともに、上輩としての親近感があったからである。「東坡集」や「欒城集」から見ると、柳瑾は丹陽の人と知れる。晩年に官職を退いて故鄕に在った。蘇軾が柳瑾と交した贈答の詩の大半は、熙寧四年に通判として杭州に出で、事のために丹陽に赴いた前後、制作された一群であった。その後間もなく、柳瑾は世を棄てて道觀に入り、やがて沒した。その死を悼んで、蘇轍は「柳子玉郎中の挽詞」を、蘇軾は「柳子玉を祭る文」を捧げたのである。かねてより姻戚の關係にあり、淺からぬ交りを重ねていた柳瑾が、若いころの「世界に雄飛しようとする志」を果し得ぬまま、詩歌に心情を傾け盡した、その詩歌を高く讃えるため、蘇軾は、ことさらに「元輕白俗、郊寒島瘦」の語をなしたのである。

蘇軾の發言は、特殊な事情の下でなされていた。とはいうものの、必ずしもその場に限られたものと見すごすことはできない。平生の認識を、何ほどかは含んでいるとも考えられるからである。「蘇文忠公詩」を見ると、しばしば元稹・白居易・孟郊・賈島の詩歌に言及する文字に會う。「迨、淮口にて風に遇うの詩を作る。戲れに其の韻を用う。」(卷二六)には、

君看押強韻　已勝郊與島

とも歌う。孟郊と賈島とは、「強韻を押す」ことが、共通の特色と見なされている。しかもその特色は、必ずしも詩歌の正統とは考えられていないようである。また「孟郊の詩を讀む」(卷一六)では、

何苦將兩耳　聽此寒蟲號

といい、孟郊の詩歌を「寒蟲の號び」に擬らえるのである。賈島にふれるものの中、「虔州の呂倚承事、年八十三、書を讀み詩を作りて已まず、好んで古今の帖を收め、貧甚しく、食足らざるに至る」(卷四五)の、

吟爲蜩蛩聲　時有島可句

の句には、釋の可朋を含めて、賈島の詩歌が「蜩蛩の聲」に似ると響かせていた。

元稹と白居易とを、並べて歌うこともある。「李公擇、高郵に過りて、施大夫と孫莘老との花を賞するの詩を見る」(卷一九)にいう。

當時謫仙人　逸韻謝封畛
詩成天一笑　萬象解寒窘

李白の詩歌は、凡百の詩人のそれと隔絕することを歌いつつ、

餘波尙涓滴　乞與居易稹

爾來誰復見　前輩風流盡

とも歌う。白居易と元稹は、李白の「餘波」を承け、やがて傳統を失うに至る「風流」をなお存していた、というのである。その故か、元稹の語句を負う詩句が、蘇軾の詩歌には處々に見える。「連昌宮詞０６８４」・「鶯鶯傳１１３５」・「工部員外郎杜君墓係銘序０９６１」を始め、越州刺史當時の、白居易に對する贈答詩などの語句である。ただ「雪谿にて興に乘ず」（卷三三）における、

猶言不見戴安道　爲問適從何處來

の下句が、舊唐書武儒衡傳（卷一五八）の

元稹依倚內官、得知制誥。儒衡深鄙之。會食瓜閤下、蠅集於上。儒衡以扇揮之曰、「適從何處來而遽集於此。」同僚失色。

によるとすれば、元稹の人柄の受け容れ方が、その文學にも及んでいると考えられる。元稹の語句が、先に掲げた範圍に限られることは、まさにこのためであろう。しかし、白居易の場合は、かなりに樣相を異にする。「軾、去歲の春夏を以つて邇英に侍立す。而して秋冬の交、子由相い繼ぎて入りて侍す。各々所懷を連ぬ。」（卷二八）の第四首には、

微生偶脫風波地　晚歲猶存鐵石心
定似香山老居士　世緣終淺道根深

と歌い、自ら注を加えて、

出處老少、大略相似。庶幾復享此翁晚節閑適之樂焉。

という。五十才を過ぎるころの文字ではあるが、このような態度は、濃淡の差こそあれ、その前後にもあつた。自ら號する「東坡」の名も南宋の龔頤正が「芥隱筆記」で示唆するように、まさしく「白樂天の詩より出ずる」のである。先にふれた「秋窗隨筆」が指摘するように、蘇軾は、「樂天の語」と「事」とを、限りなく用いている。南宋の嚴羽が「滄浪詩話」で、

和韻最害人詩、古人酬唱不次韻。此風始盛於元・白・皮・陸。

と非難する、その「和韻」のことを採り上げ、全作品の三分の一近くも制作していることが、白居易の文學受容の程度を示すであろう。ただし、白居易の文學について、批判的な言辭が全くないのではない。「蘇文忠公詩」の卷二十三に、次のような篇題がある。

世傳徐凝「瀑布詩」云、「一條界破青山色」。至爲塵陋。又僞作樂天詩、稱美此句、有賽不得之語。樂天雖涉淺易、然豈至是哉。乃戲作一絕。

世に傳稱する、徐凝の「廬山の瀑布の詩」（全唐詩卷四七四）における、「一條界（へだ）て破（さ）く　青山の色を」という句は、まことに「塵陋」なるもの。それに白居易が、「かなわない」という語で賞讃した詩までも僞作されている。白居易には、「淺易」という傾向があるにしても、ここまで至るはずがない。これがほぼ蘇軾の意見である。「白氏文集」を顧みると、「李睦州の徐凝山人を訪うを憑む３３８５」があり、全唐詩を繙くと、徐凝卷には「白使君の『木蘭花』に和す」などが見える。この文學的交渉から、さまざまな說話が出てきた。皮日休に「白居易の徐凝を薦めて張祜を屈するを論ず」（全唐文卷七九七）があり、范攄の「雲溪友議」（卷四）に、白居易が徐凝と張祜の詩を比べて、徐凝の「廬山瀑布」の方が優れると斷じたことが記錄されている。「僞作」の詩は今は傳わらないが、「東坡志林」（卷一）に、「白樂天の徐凝に贈る詩の如きは、世俗無知者の託

する所。」というように、蘇軾の時代には、「雲溪友議」の說話は、さらに脹らんでいたのである。もと徐凝のこの句は、南宋の龔頤正が「芥隱筆記」の「徐凝、界の字を用う」の項で指摘するように、文選に收められる、孫綽の「天台山に遊ぶの賦」（卷一一）における、「瀑布飛流し以つて道を界いす」の句に本づくものである。蘇軾はこれを知っていたかどうか詳かでないが、いずれにしても「塵陋」と言い切り、「樂天の詩」を「僞作」と定め、白居易を辯護していたのである。しかし、蘇軾は、白居易の文學に「淺易」という傾向がある、とは認めていたのである。このことについては、蘇軾の影響をうけていた蘇轍の發言も考慮に入れてよい。「欒城集」の「白樂天集の後に書す」（後集卷二一）に、

「聞文饒謫朱崖三絕句」、刻覈尤甚。樂天雖陋、蓋不至此也。且樂天死於會昌之初、而文饒之竄、在會昌末年。此決非樂天之詩、豈樂天之徒淺陋不學者附益之耶。

とある。「白氏文集」（四部本）卷二十の卷末に、「李德裕相公の崖州に貶さるる三首」（1405～407）が載せられるが、この三首は、ともに李德裕に對してきびし過るほどの內容をもつ。白居易は「陋」であっても、このような詩を作ることはないであろう。また白居易の死期から見ても、明らかに居易の詩ではない。居易の亞流の中、「淺陋不學」の者が加えたのであろう。蘇轍のいう「淺陋不學」の者について、南宋の晁公武は「郡齋讀書志」（卷四中）で、「或るひと曰く、浮屠の某の作る所なり、と。」ともいう。ただ蘇轍は、白居易の死期など、史的事實に關する誤りを犯してはいるが、白居易に関して「陋」という語を口にしているのである。表現にずれはあるが、蘇軾の立場に通じないでもない。

蘇軾が白居易の文學に、「淺易」の傾向がある、と批判していたことに紛れはない。

白居易に勝るとも劣らぬほどに、蘇軾が語句を尋ね發想を求める對象に、李白と杜甫とがある。先にふれた「李公擇、高郵に過ぎる」においては、白居易や元稹を高く越える者として、「謫仙」の李白があった。また徐凝の「瀑布」の詩を「塵陋」と言い切ったのも、蘇軾自ら「古來惟だ有り　謫仙の詞」と歌うように、李白の「飛流直下　三千尺」の句を含む、あの「廬山の瀑布を望む0713」という七絕を意識していたからに外ならぬ。「張嘉州を送る」（卷三一）においては、「峨眉山月半輪の秋、影は平羌の江水に入りて流る。」という二句（0274）をそのままに詩中に引きつつ、「謫仙の此の語　誰か解く道わん」とも歎じていた。李白は遠い價値であった。「張安道の『杜詩を讀む』に次韻す」（卷六）で、蘇軾は、「詩經」から始まる文學の歷史をかえりみつつ、六朝において頽落の底に陷った詩歌が、「杜陵の傑」と呼ばれる杜甫によって、傳統の回復されたことを、深く讃えていた。

天下幾人學杜甫　誰得其皮與其骨
劃如太華當我前　跛牂欲上驚峭崒

と歌うのは、「孔毅父の古人の句を集めて贈らるるに次韻す」（卷二二）である。杜甫の追髓すべくもない高さを謳うのである。まこと杜甫と李白とは、蘇軾にとって、遙かに聳え立つ靈峯にも似て、仰ぎ望むべく、近づくを得ぬ偉大であった。だが「池上」（蘇詩續補遺卷上）で、

不作太白「夢日邊」　還同樂天賦「池上」

というように、白居易とは並び得るとも考えていた。先にふれた「孟郊

の詩を讀む」では、

我憎孟郊詩　復作孟郊語

ともいつていた。中唐から晩唐にかけて、すでに詩人として名が高く、その詩歌も流傳を絶たず、なお評價されていた、元稹・白居易・孟郊・賈島を對象とし、蘇軾の詩師であつた歐陽修が、その「詩話」（歐陽文忠公集卷一二八）で、「李・杜」の詩格を「豪放」と定めた、そのような認識による平生の批判的見解を、意を以つて極端にまで突き上げたのが、この「元輕白俗、郊寒島瘦」の語であつた。

## 二

もと白居易や元稹については、早くから批判はあつた。ほぼ時を同じうする李肇は、その「國史補」（卷下）で、元和以後、才能ある文學人が、それぞれに獨自な個性によりつつ、新機軸を出したことを述べ、

學淺切於白居易、學淫靡於元稹。

とも記していた。元稹の特色を「淫靡」とするのは、「元氏長慶集」に收められる「詩に叙して樂天に寄する書０７５７」でいう、「數十首」の「悼亡詩」と、「百餘首」の「艶詩」のあつた故であろう。あるいはまた「夢に春に遊ぶ１０１０」、さらには「鶯鶯傳」なども數えてもよいであろう。まさしく元稹には、他に類を見ないほど、女性を、男女の間を對象とする作品が多い。當時にしても、通念を越えた、めざましい文學と感ぜられていたのである。杜牧は「故の平盧節度巡官たる隴西の李府君の墓誌銘」（樊川集　卷九）で、李戡の語として、

嘗痛自元和已來、有元・白者。纖艶不逞、非莊士雅人、多爲其所破壞。流於民間、疏於屏壁。子父女母、交口教授。淫言媟語、冬寒夏熱、入人肌骨、不可除去。吾無位、不得用法以治之。

と記していた。元稹のみならず、白居易もその文學が「淫言媟語」に類すると非難されているのである。白居易が加えられたのは、「長恨歌０５９６」や「『夢に春に遊ぶ』に和す０８０３」などの諸作の故であろう。「長恨歌」について、南宋初の張戒は、「歳寒堂詩話」（卷上）で、「楊貴妃の進見・專寵・行樂の事を叙するは、皆な穢褻の語なり。」と述べ、清の袁枚が「隨園詩話」（卷一）で、「苛論」といい、「腐論」と批判しつつ、「蓉塘詩話に、『白太傅、杭州に在りて、妓を憶うの詩、民を憶う詩よりも多し。』と譏れり。」と記しているが、これに似た非難は、すでに杜牧の當時にもあつたのである。高彦休の「唐闕史」（卷上）に、皇甫湜が、白居易の詩歌を「桑間濮上の音」と言い放つたことが記錄されており、皮日休は「七愛の詩」の中の「白太傅」（皮子文藪卷一〇）で、「欲（たち）まちに浮艶の詩を從（ことと）し、典誥の篇をも作り得たり。」と歌つていた。これらはおおく、「長恨歌」を意識していたのであろう。

しかしながら、南宋の葉夢得が「避暑錄話」（餘話下）で、

杜牧作「李戡墓誌」、載戡詆元・白詩語、所謂非莊人雅士所爲、淫言媟語、入人肌骨者、元稹所不論。如樂天諷諭・閑適之辭、可概謂淫言媟語耶。戡不知何人、而牧稱之過甚。

というように、白居易の文學全體に對しては當らない。すでに唐末の張爲も、その「詩人主客圖の序」において、「白居易を以つて廣大教化の主となす」と述べ、李戡とは對稱的な見方をしていた。その「主客圖の序」では、「廣大教化」の詩人として、白居易につづく「入室」の者を

掲げているが、その中に元稹も加えられていた。先にふれた「詩に叙して樂天に寄する書」では、「悼亡詩」「艶詩」も、「古諷」・「樂諷」・「古體」・「新題樂府」・「律詩」・「律諷」と數える全作品の、その一部にすぎず、「諷」の詩にこそ、元稹の重點はあつたのである。「淫言媟語」では、元稹の文學も覆うことはできぬのである。李戡の非難は偏見に滿ちており、杜牧もまた、爲す所あつて戡の語を採り上げたもの、と考えられもする。まさにこの方向の諸說がある。先にふれた皮日休の「白居易の徐凝を薦めて張祜を屈するを論ず」には、執政であつた元稹が、張祜の艶麗な宮體詩を、「雕蟲の小枝」と論評して、遂に進用を沮み、張祜に近かつた杜牧の恨みを買つた、と記されていた。范攄の「雲溪友議」によれば、杜牧は張祜の宮體詩を好み、「詩酒の交り」を重ね、張祜と對立關係にあつた徐凝を立てた白居易に、文筆による非難を試みたという。動機は別としても、李戡の口を借りて、白居易や元稹を攻擊した杜牧の態度については、後人による數多くの批判が續いている。たとえば明の楊愼である。「升庵詩話」(卷九)には、「牧の詩の淫媟は、元・白と等しきのみ。豈にいわゆる『睫、眼前に在りて、猶お見えざるがごとき』か。」とある。清の愛新覺羅弘曆の「唐宋詩醇」(卷一九)は、「夫れ居易の莊雅と牧と孰れぞ。牧の詩は乃ち纖艶淫媟の尤なるもの、而も脣を反して以つて居易を訾るか。」と責めてもいた。これとは別に、清の袁枚の「隨園詩話」(卷一)にも一說がある。杜牧の祖父にあたる杜佑が、年七十を過ぎて、なお官職に留つていたことを、白居易が「不致仕0079」の詩によつて諷刺していた。杜牧はこれを含み、ついに李戡の語に托して、口を極めて譏つたのであると。これらの杜牧批判の中、白居易については、少なからぬ反論があるが、葉夢得が「元稹は論ぜざる所」というように、稹のみに對する、積極的な辯護はあまり見えない。それはやはり、「悼亡詩」や「艶詩」などが、かなりにあつたことによるのであろう。清の秦朝釪は、その「消寒詩話」でいう。

元微之有絕句云、「曾經滄海難爲水、除却巫山不是雲。取次花叢懶回顧、半緣修道半緣君。」或以爲風情詩、或以爲悼亡也。夫風情固傷雅道、悼亡而曰半緣君、亦可見其性情之薄矣。

「風情」や「悼亡」の詩歌が、「雅」から離れ、「薄」に着くという見解は、早くから存していた。かつて梁陳の時代に、宮體詩が廣く行われたことがあつた。このことについて、「隋書」の「文學傳」(卷七六)には、

梁自大同之後、雅道淪缺、漸乖典則、爭馳新巧。簡文・湘東、啓其淫放、徐陵・庾信、分路揚鑣。

と見える。「淫放」の宮體詩は、「雅道」から乖離するものと觀ぜられていた。中唐の杜確は、「岑嘉州詩集の序」(岑嘉州詩卷首)で、

梁簡文帝及庾肩吾之屬、始爲輕浮綺靡之詞、名曰宮體。

と記しているが、中唐初においても、宮體詩は「輕浮綺靡」と見なされていたのである。元稹の時代でも、そのような觀念は存していた。この風氣の中で、元稹は敢て「悼亡詩」や「艶詩」を制作したのである。李戡の語も、たとえ偏見があるとしても、根據がなかつたのではない。また李肇が「國史補」で特記したのも、元稹の文學を覆うものではなく、その特色を指摘したものとすれば、ゆえなしとは言い難い。

「舊唐書」の「元稹傳」(卷一六六)に、稹の詩歌が樂曲にのせられ、

歌謠として流行し、宮中の妃嬪の間でもてはやされ、ために「元才子」と呼ばれていたことが記されているが、まさしく元稹は才の人であった。それまでさほど言擧げされたことない、李白と杜甫の文學を問題とし、その優劣をも論じていた。あるいは「古諷」とか「律諷」とかに分けつつ、「諷諭」をいち早く提唱したり、稀れにしか存しなかった「一百韻詩」を多く綴り、また「次韻詩」を詩歌の一體にまでせり上げもした。さらには自らの詩文をしばしば自己編集し、それを通じて自撰集という詩文集の形態を設定しもした。これらさまざまな文學的行爲は、まさに一つの創造的な營爲であった。傳統の立場から見れば、目ざましい創造は時に「輕浮」にも映る。元稹の「淫靡」といわれる特色は、實は元稹の創造活動における一方向であり、その故に「輕浮」とも評せられることとなる。ただし、このような創造活動を支持し、それを一定の結果にまで導いたのは、ほかならぬ白居易であった。白居易は「諷諭詩」を確立し、「一百韻詩」を一般化し、「次韻詩」を充實させ、自撰集を定着させた。その時代まで企てられず、また不十分にしか實現されなかったことを、始めて試み、また結實させた點に、「輕浮」という批評が下されるならば、元稹の文學活動に參加していた以上、白居易もまた、元稹と同じく批評されることともなる。唐末の「摭言」（卷二）の中に、それを見ることができる。賈島について記述する一章で、王定保はいう。

元和中、元・白尚輕淺。島獨變格入僻、以矯浮艶。

元稹と白居易とは、「輕淺」といわれる文學を意圖的に展開していたが、彼らによって導かれた「浮艶」という風氣を、「僻」と稱せられるまでに自らの文學を構成することによって、賈島は改めようと努力したと。元稹と白居易とは、「輕淺」と目されていたのである。この「輕淺」を、「浮艶」を強く意識しつつ、元稹について、「輕」を重く讀めば、蘇軾のいう「元輕」に連ることとなろう。また「僻」を強く意識しつつ、白居易について、「淺」を重く讀めば、「國史補」のいう「淺切」に連ることとなろう。

この「淺切」を「淺近」という方向に理解すれば、南宋初の張戒に一説がある。「歳寒堂詩話」（卷上）で見ることができる。

梅聖俞云、「狀難寫之景、如在目前。」元微之云、「道得人心中事。」此固白樂天長處。然情意失于太詳、景物失于太露、遂成淺近、略無餘蘊、此其所短處。

梅堯臣の語は、歐陽脩の「詩話」に、

必能狀難寫之景、如在目前、含不盡之意、見於言外、然後爲至矣。

と記錄されるものの前半である。元稹の語は、趙令畤の「候鯖錄」における、「崔鶯鶯商調蝶戀花詞」（卷五）に錄せられる「樂天謂えらく、『微之、能く人意中の語を道う』と。」を、文字を改めて引いたのである。いずれにしても張戒は、自然の景物を寫實的に表出し、衆人に通じる情意を言語に定着させることが、白居易の長所であると判斷していた。しかしこの長所も、時として短所となる。情意がこと細かにまで表現され、景物が度を過ぎて露わに描寫され、その結果、「淺近」に陷り、餘韻が殘り得ないようになる。これが短所と指摘していた。その始め伏せていた、「盡きざるの意を含みて、言外に見わし」てこそ、詩歌の至れるもの、という梅堯臣の立場を承けつぎ、白居易を批判していたのである。蘇轍が「欒城集」の「詩病五事」（三集卷八）で、白居易に言及

し、

白樂天、詩詞甚工。然拙於紀事、寸步不遺、猶恐失之。

と言うのも、やがて張戒の見解に展げらるべきものであったであろうし、清の翁方綱が「石洲詩話」（巻二）で、

詩至元・白、針線鉤貫、無乎不到。所以不及前人者、太露太盡耳。

と言うのも、白居易に重きを置いて、張戒の見解を襲ったものである。この張戒の見解は、文字を變えて別條では次のように述べられている。

其詞傷于太煩、其意傷于太盡、遂成冗長卑陋爾。

この主旨の脚注にも適わしい一文が、南宋の魏慶之の、「詩人玉屑」における「含蓄」（巻一〇）の條に、「漫齋語錄」を引いて掲げられている。

古人說雄深雅健、此便是含蓄不露也。用意十分、下語三分、可幾「風雅」。下語六分、可迫李・杜。下語十分、晚唐之作也。

古人の「雄深雅健」に對して、白居易が「冗長卑陋」となるのは、「詞」が「太煩」に、「意」が「太盡」であり、「用意」の「十分」に應じて、「下語」も「十分」となるからである、ということになる。

白居易の詩格を、「卑陋」の方向で見るものは、他にもある。南宋初の釋の惠洪の「冷齋夜話」（巻一）である。

白樂天每作詩、令一老嫗解之。問曰、「解否」。嫗曰解、則錄之、不解、則易之。故唐末之詩、近於鄙俚。

白居易が制作にあたって、老嫗に理解され得るよう配慮していたため、白居易を始めとする唐末の、その詩風が「鄙俚に近く」なったという。老嫗が理解し得るためには、何よりも先ず、表現が平易であることが條件となる。まこと白居易の詩歌には、口頭語が多い。すでに宋初より、このことはしばしば指摘されていた。たとえば劉攽の「中山詩話」には、

白樂天詩云、「請錢不早朝」。請作平聲、唐人語也。

とあり、他の語にも言及されていた。南宋においても、洪邁の「容齋隨筆」（巻一・二）、龔頤正の「芥隱筆記」、さらには陸遊の「老學庵筆記」（巻五・八・一〇）などに、さまざまと論ぜられている。惠洪が嫗解のことを採り上げたのは、こうした口頭語の使用が、白居易の詩歌に見られることが、背景としてあったからである。しかしこの嫗解のことは、惠洪の創說ではない。胡仔の「苕溪漁隱叢話」（前集巻八）に、

樂天詩雖涉淺近、不至盡如冷齋所云。余舊嘗於一小說中、曾見此說、心不然之。德洪乃取而載之詩話。

と記されているからである。ただし惠洪が「詩話」として收めたからこそ、後長く詩壇の話柄となったのである。元の辛文房は、「唐才子傳」（巻六）にそのまま事實として記述していた。明代では、李東陽が「麓堂詩話」で、

質而不俚、是詩家難事。唐詩、張文昌善用俚語、劉夢得「竹枝」亦入妙。至白樂天令老嫗解之、遂失之淺俗。

と論じていた。陳友琴氏の「白居易詩評述彙編」に收められる、鄧元錫の「函史」（上篇巻　四七）には、

香山晚嗜易甘俚、務諧衆聽、令老媼讀之能解以爲工、遂使盛際沈雄深渾之詩、至于絕響。

と歎かれていた。しかし先にふれたように、宋の胡仔は、早くも疑っていた。明代でも楊愼は「升庵詩話」（巻三）で、白居易の「嚴給事の『玉

藥花』に酬ゆ２５８９」を擧げ、「此れ豈に老嫗の能く解するものならんや。」と言い、白詩の中に、高度に洗練された作のあることを明らかにし、嫗解のことを退けていた。俞弁もまた「逸老堂詩話」（巻下）で、

李西涯詩話云、「樂天賦詩、用老嫗解、故失之粗俗」。此語蓋出於宋僧洪覺範之妄談、殆無是理也。

と、李東陽が嫗解のことを引くのを非難し、覺範惠洪の説を「妄談」にすぎぬと斷じていた。清の汪立名に至つては、白居易の「詩解２３４５」について、元の馬端臨の「文獻通考」（經籍考巻六〇）に記される周必大の、

香山詩語平易、文體清駛、疑若信手而成者。間觀遺稾、則竄定實多。

という文字を擧げ、北宋の彭乘の「墨客揮犀」を、文字を改めて引き、嫗解のことを記し、續けて

其意不過欲竭力形容一俗字耳。且毋論其他。試擧公晚年長律、其根柢之博、立格鍊句之妙、果皆老嫗所能解否邪。其説之邪謬、眞可付一噱也。

と論じていた。「唐宋詩醇」は、この汪説を承け、「附會の説、深く辯ずるに足らず。」と切り棄てていた。嫗解のことは、事實としてはあり得べからざることであり、俞弁が言うように「妄談」である。しかし白居易の詩歌が、老嫗でも理解し得ると考えられるような、「鄙俚に近い」ものを、時としてうち出すからこそ、「妄談」も生れ、以後、關心がもたれてきたのである。蘇軾が徐凝の詩に關して、白居易の文學には「淺易」という傾向がある、という判斷を響かせる文字を連ねたのも、まさしくこのような事實を洞察していたからである。

嫗解のことについて、先に掲げた胡仔の文に、「舊と嘗つて一小説中にて、此の説を見たり。」とあつた。この「一小説」とは、恐らくは、汪立名が「詩人玉屑」（巻一六）によつて掲げる、北宋の彭乘の「墨客揮犀」（巻三）であろう。その書は遺文軼事を中心として、詩話文評をも加え、「小説」と呼ばれるに適う書であつた。この書では、「冷齋夜話」より二字三字多い文を載せている。惠洪は彭乘と同じく筠州の高安の人であり、俗姓は彭氏に紛れはなく、彭乘に對して同族の後輩にあたつていた。「冷齋夜話」によつて、「墨客揮犀」が補われたとするよりも、胡仔の「惠洪乃ち取りて之を詩話に載す」という語を考慮に入れつつ、同族の先輩の記事を承けて、惠洪が「墨客揮犀」から「冷齋夜話」に取り入れたと考えるべきであろう。とすれば、嫗解のことは、「墨客揮犀」から始まることとなる。この嫗解のことと表裏していた、白居易の詩歌が「鄙俚に近い」という意見は、蘇軾の時代、すでに行われていたのである。もともと白居易においては、「俚」は必ずしも避くべきことではなかつた。むしろ時には、白居易自らそれを主張さえもしていた。「新樂府五十首の序０１２４」では、制作の意圖や態度を宣明しつつ、

其辭質而俚、欲見者之易諭也。

と述べていた。ただしこの一文には「白氏文集」の諸本の間に差異がある。通行諸本では、「俚」の字が「徑」となつているが、我が國の平安朝鈔本、たとえば神田喜一郎博士所藏の「文集」を始めとして、數少くない舊鈔本群は、通行諸本と異つて紛れもなく「俚」と書かれ、さらに「いやし」の訓も加えられている。すでにふれた李東陽の文に、「質に

して俚ならず、是れ詩家の難事。」という句が見えていたが、「質にして俚ならず」は、早い時代から、文學論上の用語として行われていた。白居易は、それを意識しつつ、ことさらに自己の立場を主張しようにして、「不俚」を「俚」としたのである。「俚」こそ白居易の舊と認めらるべき文字である。白居易は、「俚」なることを求めてもいたのである。もとよりそれは、「辭」についての志向であつた。しかし「辭」が「俚」となれば、「意」にも及ばざるを得ぬ。かつて雅語は、それに適わしい風雅な情意しか表現できなかつた。「俚辭」は、少くとも雅語が洩らしいたものをも、汲み上げる可能性はもつている。「辭」が「俚」であることは、單に「辭」のみの問題にではないのである。彭乘が、白居易の、このような志向を知悉していたかどうかは別として、白居易の文學を「鄙俚」の傾向において見ていたことは、あながちに否定さるべきではない。と同時に、蘇軾の「淺易に渉る」という判斷が、彭乘のいう「鄙俚に近し」という見方に通ずるとすれば、言語表現の現象に止ることなく、白居易の文學の内部に根據をもつこととなる。

## 三

白居易は「俚」なるものをも、文學に包攝しようとした。このことは、詩歌の中で具體的に見ることができる。すでに劉攽の「中山詩話」を引いて、口頭語の使用について言及したが、胡仔の「苕溪漁隱叢話」(卷一四)に、北宋の「陳輔之詩話」を引いて

世間俗言語、已被樂天道盡。

という、王安石の語が掲げられるが、いわゆる「俚語」は、廣範にわたつて用いられている。しかも極端と考えられるものさえしばしば見える。たとえば清の薛雪は、「一瓢詩話」で「元・白の詩は、言淺くして思い深し。」と言いつつ、

即用現前俚語、如「矮張」「短李」之類、斷不可學。

と戒める。「矮張」は「元氏長慶集」にも、「白氏文集」にも見えぬ。恐らくは「江樓にて、夜、元九の律詩を吟ず。1009」における、

老張知定伏　短李愛應顛

の「老張」の筆誤であろう。「短李」は白居易の語である。「書に代うる詩、一百韻、微之に寄す0608」の

笑勸迂辛酒　閑吟短李詩

に見え、また「拙詩を編集して一十五卷を成し、因りて卷末に題し、戲れに元九・李二十に贈る1006」の

毎被老元偷格律　苦教短李伏歌行

にも見える。前者の原注の「辛大丘度、性迂にして酒を嗜なむ。李二十、形短くして詩を能くす。故に當時、迂辛・短李の號あり。」によれば、紛れもなく李紳のことである。薛雪は渾名のような、生活に密着した、生々しい口頭語は用いてはならぬという。その理由は定かではないが、注を加えなければならぬほど、特定の時間や空間に限界づけられる語は、句中の他の詩語と調和し難いと見るからであろう。しかしこれらの語彙を含む詩は、題によつて明かなように、寄贈の作である。しかも「書に代う」においては、生活を共にしていた當時への回想、「拙詩を編集す」においては、文學的知己と相い許す者への「戲れ」の句の中に置かれる。白居易にとつて、これらの語は、生活の情感を表出するに適

わしいものと考えられていたのである。その故にこそ、「迂辛」とか「老元」とか、また「老張」など、上引の詩句に出るものを始めとして、この傾向の「俚語」も少くないのである。白居易においては、「俚語」も、生活の情感や意識を表出するためには、避けらるべきではなく、時には積極的に組み込まるべきものであった。このような「俚語」に類して、白居易が自ら「鄙語」と名づける一群も、詩歌にしばしば取り上げられている。「鷹を放つ0039」の詩は、

　鄙語不可棄　吾聞諸獵師

と結ばれるが、この「鄙語」とは、一篇の冒頭から歌われている、鷹を御する技法についての、鷹匠の言葉である。「新豐の臂を折りし翁0133」は、かつて若い日に徴兵忌避の行爲を敢てした、老翁の告白が綴られている。「唐宋詩醇」（巻二〇）は、「促促棘棘として、其の聲を聞くが如し。」と評するが、まさしく老翁の口吻さえも寫していた。庶民の中の個人の言葉のみではなく、民衆の間で語り傳えられている言葉もまた、白居易は進んで對象とする。あの「長恨歌0596」もその一である。「唐宋詩醇」（巻二二）には、「長恨の一傳は、自ら是れ當時の傳會の說。」といい、趙翼は「甌北詩話」（巻四）で、

　方士訪至蓬萊、得妃密語、歸報上皇一節、此蓋時俗訛傳、本非實事。

と述べる。方術の士が仙界に楊貴妃を訪ねる一段は、事實であろうはずがなく、民衆の間で脹らんできた說話であるという。疑いもなく一篇は、「俚俗の傳聞」を定着させたものである。白居易は名もなき民の言葉や物語り、さらには民衆の中で語り傳えられている說話など、しきりにその文學の中に吸收していた。それは庶民の感情や意識を、文學の上に展開させることでもあった。清の劉熙載が「藝概」（巻二）で、白居易を杜甫と元結と並べて、

　代匹夫匹婦語最難、蓋飢寒勞困之苦、雖告人人且不知、知之必物我無間也。白香山不但如身入閭閻、目擊其事、直如疾病之在身者無異。

というのは、いわゆる「諷諭詩」についてであるが、廣く「匹夫匹婦に代るの語」は、杜甫や元結よりも、白居易が遙かに多い。白居易は「匹夫匹婦」の情感や意識を自己の中に組み入れようとした。これに成功すれば、たとえ個人の意識や情感であっても、それは人間そのものの意識や情感に廣がる。俞弁が「逸老堂詩話」（巻下）で、

　白樂天詩、善用俚語、近乎人情物理。

と評價するのは、この故である。

「人情物理」に傾けば、かつて張戒が非難したように、「景物太露に失し、遂に淺近を成し」やすい。趙翼は「甌北詩話」（巻四）で、全集の中、亦た拙句・率句あるを免れず。」といい、

　如「西樓喜雪」云、「散麵遮槐市、堆花壓柳橋」。又云、「北市風生飄散麵」、以散麵喻雪、何異撒鹽。「答杜相公以詩見寄」云、「剪截五言須用鉞」、以其官節度、秉旄鉞也。然太生硬。

に續けて、なお數句を擧げ、

　當時有「元輕白俗」之誚、蓋爲此等句也。

と結ぶ。「撒鹽」は劉宋の劉義慶の「世說新語」（言語篇）に見える。謝安の兄の子である胡兒が、降る雪を「鹽を撒く」ごとしと形容したのに對し、謝奕の娘の道韞が、「柳の絮」と答えて、趣きがあると賞された

という。趙翼は、白居易が飛雪を「散麺」に擬するのは、「撒鹽」に似て小兒の發想の如く卑近である、と評する。鹽は強い日常性をもち、ともすれば詩的興趣を減殺する。この麥粉は、鹽ほど散ることが不自然に受けとられないとしても、なお日常性の強さにおいては通じる。その故に、色においては雪にかよいつつも、なお詩歌では採られなかつた。ただ元稹の「西歸絶句 0553」に、事態は異るが、「風 麺市を回りて天に連りて合す」の句があるだけである。白居易は、元稹の句を意識するよりも、かつて用いた「柳絮」や「鵝毛」を越えて、新しい比喩を求め、平生起居の間、意識の表面をかすめて消え去る、極めて日常的な發想を、ここで文字に定着させたのである。「五言を剪ち截るに須らく鉞を用うべし2635」の句は、西川節度使の杜元穎の詩を讃える第三句であるが、文集では「須」を「兼」とする。「須」は筆誤である。もと「鉞」は大斧で、生殺與奪の大權を示すものとして、將軍に授けられたもの。詩歌を讃えるのに、現實的な權威を示す「鉞」を用いるのは、いかにもぎこちないと、趙翼は言う。「偶作2283」に「人間 重んずる所のもの、相印と將軍の鉞。」とあるように、「鉞」は常識の崇めるものであつた。「宣武の令狐相公、詩を以つて寄せらる2418」で、「謝朓の文章韓信の鉞」と言うように、「鉞」に加えて「文章」があれば、通念として、世間最高の榮譽となる。この句は「詩」と「權」とを、「剪截」の語で結んでおり、すべて常識的な感覺に支えられていた。このような日常的な、あるいは常識的な發想は、特異な事象よりも、生活の事實や環境へ傾斜をもつ。清の潘德輿は「養一齋詩話」(巻三)で、白居易の五律について、「靈機内に運り、煆煉自然」といいつつも、時に數句を掲げ、末に

「無奈嬌痴三歳女、繞腰啼哭覓銀魚」。彌淺而俚矣。學之必成郵巷盲詞、不可不愼。

という。「初めて尚書郎に除せられて、刺史の緋を脱す1175」という七律の結である。刺史の印である「銀魚」を外し、尚書郎の正裝を着用してみた時、家庭の中で起つた一些事を歌う。潘德輿によれば、「淺にして俚」の甚しいものである。しかし白居易はこのような些事を歌つて止まない。兒女について見れば、「玉芽 手爪を開き、酥顆 肌膚に點ず。」という句を含む「阿崔2825」もある。查慎行は「白香山詩評」(巻上)で、この句を挾む數行を、「描寫好し」と評し、「唐宋詩醇」(巻二五)は「小兒の初生を寫し、端詳にして細に入る。」と展げ、さらに「此の種、自から香山の獨歩に讓る。」と讃える。この幼兒の死に當つてものされた「崔兒を哭す2880」については、「白香山詩評」(巻上)で載華は、

學者於此細參、卽眼前語意、可免庸俗之病。

と評するに至る。身邊の雜景雜事について歌いつつ、そのまま「庸俗」の域を越えた境涯に、白居易は到つていた。王士禎は「帶經堂詩話」(巻二)で、絶句について、

眼前景語、却往往入妙。

とも言う。時に「淺にして俚」と見られることはあつても、白居易はすでに「庸俗」ではないのである。

宋の范晞文の「對牀夜語」(巻三)にいう。

白樂天「想得家中夜深坐、還應說著遠行人」。語頗直、不如王建「家

中見月望我歸、正是道上思家時。」有曲折之意。

范晞文によれば白居易の一聯（０６６０）は、上句の想が下句に直流し、王建の「行くゆく月を見る」（全唐詩卷二九八）の一聯のように、句々獨立しつつ、しかも下句によって始めて上句が位置づけられような、「曲折」の趣きがないと。胡仔も「苕溪漁隱叢話」（後集卷一三）で、「塵史」を引いて、白居易の「江樓にて夜吟ず１００９」における、

白頭吟處變　青眼望中穿

の句と、杜甫の「秦州にて勅目を見る２０・４０」における、

別來頭併白　相見眼終青

の句とを比較しつつ、杜甫は故事の用い方に、「離析」し「倒用」する工夫があり、「語は峻に、意もまた深穩」となるが、白居易は正面切って受け容れ、平板に終始すると指摘する。すべて白居易の構想には、屈折や飛躍が乏しい。そのため直線的に流れ進み、「一意衍して千言に至る」傾向を孕んでくる。宋の吳曾は「能改齋漫錄」（卷八）でいう。

白樂天「野火燒不盡、春風吹又生」。余以爲不若劉長卿「春入燒痕青」之句、語簡而意盡。

白居易の「古原の草０６７１」の二句は、劉長卿の凝結した一句を展べ開いた形とも見られる。清の施補華の「峴傭說詩」は、「琵琶行０６０３」について、

較有情味、然「我從去年」一段、又嫌繁冗。如老嫗向人談舊事、叨叨絮絮、厭瀆而不肯休也。

ともいう。「繁冗」と批判するのである。これが先に掲げた張戒の「其の詞、太煩に傷われ、其の意、太盡に傷われ、遂に冗長卑陋を成す」ことであった。しかしながら、潘德輿は「養一齋詩話」（卷四）で、白居易や張籍の樂府について、宋の魏泰の語として、

述情叙怨、委曲周詳、言盡意盡、更無餘味。

と記し、これについて、「諷諭は痛切にして、以って百世の心を動かすべし。孔子、復た出で、詩を刪ると雖も、亦た廢すること能わざらん。」と述べ、さらに語を續けて、

泰徒以六朝隱約意思爲「風騷」遺響、而不知樂天・文昌樂府之可貴、此以皮毛相詩者。

と自己の見解を打ち出していた。「委曲周詳」は、必ずしも否定さるべきものではない、と主張するのである。まさしく白居易は、樂府を含めて詩歌の全領域にわたって、獨自な様式を試みていたのである。「新昌の新居にて事を書する四十韻１２５９」について、「唐宋詩醇」（卷二四）が、

鋪敍新居、詩中有畫。或議其俚俗瑣碎、然不可及處正在此。入他人手、必不能如此詳細。過求詳悉、必不能如此位置妥帖。

というように、「俚俗瑣碎」がそれで終らず、他人の及び難い、獨得の「詳細」に至り得ていたのである。「悟眞寺に遊ぶ一百三十韻０２６４」について、趙翼は「甌北詩話」（卷四）で、一篇の構成を分析して、「層を逐いて鋪敍す」と評し、「唐宋詩醇」（卷二一）は、「步驟井然として一絲紊れず」と歎じ、さらに「記序を作るの手筆を以って、之を詩に用いたり。」と論じていた。また「書に代うる詩、一百韻０６０８」については、杜甫の「秋日、夔州にて懷を詠ずる２９・０３」に言及し、その「排奡沈鬱、局陣變化」を白居易と比較しつつ、

居易法律井然、條暢流美、實可爲後來之法。

と結論していた。「俚俗瑣碎」も「法律井然」たる構成の上に、「條暢流美」に轉じていたのである。

査慎行は「白香山詩評」で、「東城の桂、三首」の第二首2433における、

長憂落在樵人手　賣作蘇州一束薪

の下句を取り上げ、「太だ淺なれば俚に近し」と非難していた。文字通りの意味に過ず、常識を表象するだけで、雅致がないと言うのであろう。しかし清の毛奇齡は「詩話」(巻二)で、「三首」について次のように記していた。

樂天有詩云、「桂花詞意苦丁寧」、謂其曲韻怨切、動能感人。初不知其詞如何、及考其詞、甚俚鄙。如云「月中幸有閑田地、何不中央種兩株。」是底語。先子嘗論樂、謂此詩本詠吳城桂三首之一。前二首但傷名材多棄地耳。此一首則有風朝廷應用賢意。觀此、則月中二句、正是佳語。

その始め、三首ともに「甚だ俚鄙」と考え、ことに第三首の「月中　幸いに閑田地あり、何ぞ中央に兩株を種えざる」二句は論外とも見なしていたが、諷諭する所を知り讀み直すと、まさに「佳語」と悟るに至った、という。「白氏文集」を繙けば、「三首」の序に「其の地を得ざるを惜しむ」といい、「醉後、桂華曲を唱うるを聽く3356」にも「意を得ざる人をして聽かしむるなかれ」と歌うことから見れば、毛奇齡の至り得た見解は、詩人の意圖に沿うものである。「賣作」の一首も、まさしく「名材の地に棄てられしを傷む」の作である。しかもこの句は、「戰國」の「楚策」に載る、

蘇秦之楚。三月乃得見王、曰、「楚國食貴於玉、薪貴於桂。」

という、蘇秦の故事を響かせる。さらには、かつて宰相でもあった元稹が、當時、越州刺史として任期を越えて放置されていた事態をも想起させる。一句は査慎行の思いも及ばぬ所で形象化されていたのである。「太だ淺なれば俚に近し」という評語は、かつての毛奇齡の場合と同じく考え直さるべきであろう。宋の周芝之の「竹坡詩話」に、

白樂天「長恨歌」云、「玉容寂寞淚闌干、梨花一枝春帶雨」。人皆喜其工、而不知其氣韻之近俗也。

と見える。「俗に近い」という理由は定かでないが、あるいは陳善が「捫蟲新語」(巻八)で、林邦翰の語として採り上げている「脂粉の氣あるを免れず」という、そのためかも知れない。しかし異る見解もある。張戒は、「長恨歌」を「樂天の詩中に在って、最も下となす。」(巻上)と評しつつも、

一篇之中、惟此數語稍佳爾。

という、その數聯の中の一である。また胡仔も「苕溪漁隱叢話」(後集巻一三)で、李賀の「將進酒」の句である、「桃花亂れ落つること紅雨の如し」などとともに、

皆古今詩詞之警句也。

と賞していた。周芝之や陳善の非難するものを、張戒は「稍や佳なり」といい、胡仔は「警句」と言っているのである。王士禎は「帶經堂詩話」(巻二)で、

「可憐八月初三夜、露似珍珠月似弓。」之類、似出率易、而風趣復

非雕琢可及。

という。二句は「暮江吟１２９１」の轉結である。「一道の殘陽　水中に鋪き、半江　瑟瑟として半江は紅し。」の起承をこめて、「唐宋詩醇」（巻二四）は、

寫景奇麗、是一幅著色秋江圖。

とも評していた。まさに「眼前の景」を寫し、「率易」に似た表現で、「雕琢の及ぶべくもない」「奇麗」を創造していた。白居易の「唐生に寄す００３３」における、「文字の奇を務めず」という句について、清の沈德潛は、「唐詩別裁集」（巻三）で、「白傅の詩の作る、總て是れ此の旨」と論じ、劉熙載が「藝概」（巻二）で、

常語易、奇語難、此詩之初關也。奇語易、常語難、此詩之重關也。

香山用常語得奇、此境良非易到。

と提言するのも、この故である。

白居易は「俚」なるものをも包攝しようとした。先ず「俚語」を取り、やがては「俚俗の傳聞」を組み込んだ。また極めて常識的な感覺から、日常生活やその環境における些事に目を注いだ。さらには屈折や飛躍の少い、直流的な發想でもつて、言語を構成した。その結果、「淺易」と目せられるような表現の中に、技巧の痕迹を止めぬ風趣を形成していた。そしてついに、葉燮をして「原詩」（外篇）において、

人每易視白、則失之矣。

と注意をうながし、語をつづけて、

白俚俗處而雅亦在其中、終非庸近可擬。

と言わしめるに至っていたのである。

## 四

趙翼は「甌北詩話」（巻四）における白居易論評を、次の言葉で始めている。

中唐詩、以韓・孟・元・白爲最。韓・孟尚奇警、務言人所不敢言。元・白尚坦易、務言人所共欲言。試平心論之、詩本性情、當以性情爲主。奇警者、猶第在詩句間爭難鬥險、使人蕩心駭目、不敢逼視。而意味或少焉。坦易者、多觸景生情、因事起意。眼前景、口頭語、自能泌人心脾、耐人咀嚼。此元・白較勝於韓・孟。世徒以輕俗訾之、此不知詩者也。

趙翼はもともと、元稹と白居易との差異を認めていたから、「元・白」と連ねはするものの、白居易を中心にすえて、この論をなしているのである。生活の環境における事象に目を向け、そこから觸發される情感や意識を、日常性を帶びる言語構成で歌い上げる。生活の環境における體驗であるから、個人の體驗ながら、實は人々の體驗にも連り、個人の情感や意識でありながら、そのまま多くの人々の情感や意識にも通じ合う。しかも日常性を帶びる言語構成の故に、多くの人々に理解され易く、讀む者をして、かつて相い似た情感や意識を懷いたことを想起させ、ついに自己に代って鮮やかに表現しているという感慨までも惹き起させ、感銘を蕩わせつつ長く反芻させるに至る。これこそ詩歌の本質に卽する文學であり、（元輕）「白俗」として見過すべきではない、と主張している。清の田雯が「古觀堂集」（雜著巻二）で、五律を論じつつ、

樂天、極清淺可愛、往往以眼前事爲見到語、皆他人所未發。

というのも、先にふれた明の俞弁の、

白樂天詩、善用俚語、近乎人情物理。

というのも、金の王若虚が「滹南詩話」（巻一）で、

樂天之詩、情致曲盡、入人肝脾。

といい、語を續けて、

世或以淺易輕之、蓋不足與言矣。

というのも、宋の張戒が、

專以道得人心中事爲工。

というのも、すべてこの趙翼の見解に至る一面を、それぞれに指摘したものであつた。

ただしこのような見解は、また一つの意見を導き出していた。鄧元錫の「函史」（上篇巻四七）の

香山晩嗜易甘俚、務諧衆聽。

という語に見える。白居易は後年、「坦易」「鄙俚」の趣きを好み、ことさらに衆人の耳に入り易いように努めた、というのである。この意見は、陳友琴氏の「白居易詩評述彙編」に載せられる、范士楫の「歴代詩家」では、さらに強調されている。

汲汲乎下偶俗好、今日訂老婢、明日鬻雞林。

といい、さらに次の語をも加えている。

無慘中、流連景物、取易解以快淺人。

「老婢に訂す」とは、あの「墨客揮犀」に見えていた嫗解のことであり、「雞林に鬻ぐ」とは、元稹の「白氏長慶集の序０９４８」における、新羅の商人が本國の宰相のため、白居易の詩歌を購つたという記録にもとづく。いずれも、白居易の世人に迎合しようとする態度によると、理解されている。この批判を含んで奇矯にも響く意見は、それだけにまだ不十分にしか解明されていない考察へいざなう。

それまで詩歌を創作するのは、教養を積んだ知識層であり、享受するのもまたほぼ同じ階層に限られていた。時に絶句や樂府詩が音曲にのせられ、歌謠として廣く唱詠されるような現象はあつても、基本的には變化はなかつた。この長く續いた事態を一變し、白居易は享受層を驚くほど擴大させたのである。「元九に與うる書１４８６」で、四十四才の白居易は書いていた。

聞有軍使高霞寓者、欲聘娼妓、妓大誇曰、「我誦得白學士長恨歌、豈同他妓哉」。由是增價。又足下書云、「到通州日、見江館柱間、有題僕詩者」。復何人哉。又昨過漢南日、適遇主人集衆樂、娛他賓、諸妓見僕來、指而相顧曰、「此是秦中吟・長恨歌主耳」。自長安抵江西、三四千里、凡鄉校・佛寺・逆旅・行舟之中、往往有題僕詩者。士庶・僧徒・孀婦・處女之口、每每有詠僕詩者。

元稹も「白氏長慶集の序」で、重ねて次のように述べていた。

禁省・觀寺・郵堠・墻壁之上無不書、王公・妾婦・牛童・馬走之口無不道。至於繕寫模勒衒賣於市井、或持之以交酒茗者、處處皆是也。

さらにはまた、

余於平水市中見村校諸童、競習詩。召而問之、皆對曰、「先生教我樂天・微之詩」。固亦不知予之微之也。

と加えていた。白居易が五十三才の時であつた。この數年後のこととし

て、馮贄の「雲仙雜記」（巻四）には、「豐年編」によって、次のような記事を載せている。

開成中物價至微。村落買魚肉者、俗人買以胡絹半尺、士大夫買以樂天詩一首兼與之。

元稹の「之を持つて以つて酒茗に交うる」ことに類する事實である。七十五才で全集を手定した時、「後記３６７３」をしたため、「日本・新羅の諸國、及び兩京の人家」に、數多くの傳本がある、とも加えていた。わが國にもすでに將來されていたのである。沒後、李商隱は白居易の墓誌銘を作り、その序（李義山文集　巻四）で、

姓名過海、流入鷄林・日南有文字國。

と記していた。また宣宗は死を悼んで、

童子解吟長恨曲　胡兒能唱琵琶篇

の二句を含む七律一篇を作つて獻げた、と宋の尤袤の「全唐詩話」（巻一）に見える。「新唐書本傳」（巻一七四）に「宣宗、詩を以つて之を弔う」という、その詩がこれであろう。數年の後、段成式は「酉陽雜俎」（前集巻八）に、任地の荆州で、「頸より已下、遍く白居易舍人の詩を刺し」、「刻すること三十餘處、首體完膚なき」者があつたと記していた。まことに元稹が「白氏長慶集の序」で、

自篇章以來、未有如是流傳之廣者。

と感嘆するように、流傳の廣さは古今未曾有のことであつた。

「牛飼い童」や「馬の口取」を含む庶民が、白居易の詩句を誦し得たのは、文字の媒介を必要とはしなかつたであろう。杜牧の「李府君の墓誌銘の序」にも、「口を交えて教授す」とあつた。もともと白居易は、口誦し易い形式を、意識して採つていた。「新樂府の序」には、

其體順而律、可以播於樂章歌曲也。

とも述べていた。「律」の字を、今本諸本は「肆」とするが、神田喜一郎博士所藏「文集」によつて改めれば、いよいよ律調への配慮が明らかとなる。この「新樂府」を導き出した元稹の「新題樂府」（０６８６～０６９７）が、すべて七言で貫ぬくのに對し、白居易の作が、「序」で「句に定字なし」と宣言し、時に三字句を重ね、時に襯字を加えて九字・十字の句を雜えることが象徴しよう。もとよりその律調は、樂府體とか、民間歌謠とかを意識していたのである。白居易は早くから樂府體の詩歌は制作していた。「短歌行０５７８」を始めとする一群である。また「近代曲辭」ともいうべき作品も多い。「竹枝１１４８」「楊柳枝３１３８」「何滿子３５０５」を中心とする作品群である。中には歌詩が先行し、やがて音曲にのせられる場合もあつた。先にふれた「東城の桂」が、後に「桂華曲」として歌われていたのも一例となる。ただし「楊柳枝二十韻３１９０」で、「楊柳枝は洛の下の新しき聲」と自ら注するように、新しい曲調に應じて作詞されたものもあつた。また白居易は民間の歌謠へも深い關心を懷いていた。「湘妃怨を彈ずるを聽く１３０５」における、「道うに似たり　蕭蕭　郎は歸らずと。」の句下に、「江南の新詞に云えるあり、『暮雨　蕭蕭　郎は歸らず』と。」と自ら注していた。この「江南の新詞」とは、「殷協律に寄す２５６５」の自注によれば、「江南の吳二娘曲の詞」である。當時、杭州や蘇州あたりで、廣く行われていた曲詞であつた。また「醉歌０６０７」で、

誰道使君不解歌　聽唱黃雞與白日

黄雞催曉丑時鳴　白日催年酉前沒

と歌う。この「黄雞」と「白日」とについて、「丑の時に鳴く」と「酉の前に沒す」と唱えるが、これらの句には、何ほどか民間歌謠の響きがある。その民歌とは、羅振玉の「敦煌零拾」（五）に載せられる、「俚曲」の中の「十二時」の類でもあろうか。「十二時」には、「鷄は丑に鳴く」・「日は酉に入る」の語が必ず含まれているからである。いずれにしても、白居易は歌謠に對して關心をもつていた。この關心が、濃淡の差こそあれ、さまざまな詩歌に反映していたのである。王拾遺氏がその著「白居易」（第一〇章）で、

白居易對于民間歌謠的學習、不是硬搬、而是體會它的神髓、然后融化到自己創作中來、所以沒有拟的痕迹。

と印象的に語るが、當を得ているであろう。白居易はたしかに個有の律調を作り上げていた。清の黄子雲は「野鴻詩的」でいう。

香山琵琶行、婉折周詳、有意到筆隨之妙。篇中句亦警拔。音節靡靡、是其一生短處、非獨是詩而已。

この「音節の靡靡たる」ことは、言語の機構に止らず、詩歌の內面を規定しつつも、唱誦され易い條件となり、ついに未曾有の廣い流傳を結果するのに、與つていたのである。

しかしながら、この廣い流傳を結果したのは、根本的に詩歌そのものが、趙翼のいうように「坦易」であり、多くの人々の理解を容易にしていたからである。このことは、「音節の靡靡たる」ことと同じく、白居易が自ら意圖したことである。もともと白居易の制作には、對人意識が濃厚に働いていた。贈答唱和の作品が目立ち、數々の「唱和集」さえも、本集とは別に編集されていたことが象徴するであろう。寄贈の作は酬答を豫定し、酬和の作は寄贈の上に立ち、常に對人的な意識を基盤としているからである。作品は常に「讀む者」や「聞く者」を意識しつつ制作されていたのである。その意識は、理解の期待をも含んでいた。先にふれたように、「新樂府の序」でも、「讀む者の諭り易からんことを欲すればなり」と記されていた。のみならずそこには、

其言直而切、欲聞者之深誡也。

とも加えられていた。したがつて言語表現も、理解され易いよう構成されねばならなかつた。「錢塘湖石記２９１８」の末尾に、

欲讀者易曉、故不文其言。

と、ことさらに述べていたのも、この故である。元稹に與えた「和答詩十首の序０１００」で、白居易は自らその文學を批判していた。

毎下筆時、輒相顧語、其意太切而理太周、故理太周則辭繁、意太切則言激。然與足下爲文、所長在於此、所病亦在於此。

さらに續けて、こうも加えていた。

待與足下相見日、各引所作、稍刪其煩而晦其義焉。

白居易は自己の文學の「煩」なることを、自覺していたのである。そして「辭」が「繁」なることは、自己の意識の流れに沿うことであり、そのまま他人の理解を容易にする形式であるとも判斷していたのである。時には「其の義を晦うす」るための營みもなされたであろう。「詩解２３４５」にも、

舊句時時改　無妨悅性情

と歌つていた。褚斌傑氏はその「白居易評傳」（一四七頁）で、周了閒の

「香山詩評」を引き、

陳檢討有詩云：『白家老嫗休輕誦、曾見元和藁本來』。自注云：『張文潛以五百金購白居易詩本、見其窜改塗乙、几不存一字。』蓋其苦心如此。

と記している。改訂は全面的に施されていたのである。これは先にふれた、「文獻通考」に引かれる周必大の、「間ま遺稿を觀るに、則ち竄定すること甚だ多し。」という語と符合する。しかしながら、その結果は、周必大が言うように、「香山の詩語は平易」であったのである。袁枚も「續詩品」で、

白傅改詩、不留一字。今讀其詩、平平無異。

と述べていた。白居易は、いわゆる「語、人を驚かさずんば死すとも休まず。」という方向に、その精魂を傾けたのではない。また自らいうように、「其の義を晦うせん」と努力したのでもない。むしろ「喻り易い」ように、また「曉り易い」ようにと、意識しつつ稿を改めていたのである。

このような立場から産出された文學について、鄧元錫は「函史」で、

令老嫗讀之能解以爲工、遂使盛際沈雄深渾之詩、至于絕響。施及晚唐、格每下而力劣、聲殺削而音微、意苦研而思窒、而唐風不競矣。

と批判していた。彭乘が始めた嫗解のことは、もはや取り立てるまでもないが、その「故に唐末の詩、鄙俚に近し」という見解が、ここでさらに強調されていることは注意されてよい。盛唐における「沈雄深渾」の傳統を、斷絶させる結果を導いた、と加えるのである。白居易が、晩唐の情況に對して、ひとえに責任があるかどうかは別として、その詩格が杜甫を中軸とする「沈雄深渾」なるものと、遠く離れていることは明らかである。沈德潛も「唐詩別裁集」(卷三)で、

遇事託諷、與少陵相同。特以平易近人、變少陵之沈雄渾厚、不襲其貌、而得其神也。

と述べているが、まさしく「貌」について見れば、兩者の差異には歴然たるものがある。白居易は、杜甫に代表される「沈雄渾厚」の文學を知りつつ、それとは異質の文學を建立しようと志向していたのである。この志向を端的に示すのは、「新樂府の序」における、「質にして俚」という語である。もともとこの語は、先にふれたように、「質にして俚ならず」という、傳統的な觀念を意識しつつ提出されたものである。盛唐の張守節の「史記正義の序」に、

裴駰服其善序事理、辯而不華、質而不俚、其文直、其事核、不虛美、不隱惡。故謂之實錄。

とある。「史記集解」を著わした劉宋の裴駰の、司馬遷の「史記」に對する見解を記した一節である。たしかに「史記集解の序」には、これらの文字が見える。しかしそこでは、裴駰自らの見解として書かれているのではない。上の文に卽して言えば、「裴駰」の二字はなくして、代りに「劉向・揚雄、博く群書を極めしより、皆、遷は良史の才ありと稱し」という句がある。この「史記」についての見解は、漢の劉向や揚雄に屬するものである。しかもその全文は、班固の「漢書」における「司馬遷傳の贊」(卷六二)に、一字を變えずしてそのままに見える。「漢書」に見える「史記」への評價は、六朝を經て盛唐に至るまで、變ることなく續いていた。そして白居易もまた、この評價を承けついでいた。その故にこそ、「新樂府の序」において、この評價に沿いつつ、「其の言

『直』にして切」と述べ、「其の事は『覈』にして實」と述べていたのである。「新樂府の序」は、「漢書」の「司馬遷傳の贊」を意識して作られていたのである。しかしながら、「質にして俚ならず」という一點において白居易は「漢書」から離れる。離れるというよりは拒否すると言うべきであろう。もと「漢書」の注で、劉德は「俚は鄙なり」と記し、如淳は一句を總括して、「質と雖も、猶お閭里の鄙言の如くならざるを言う。」と述べていた。「不俚」は、「質」の陷りやすい缺點を止めるべく加えられた語である。白居易は、六朝の「華」なる文學への批判から、遠く周秦・漢魏を顧みて、「質」を受け容れた。しかし齒止めとして加えられた「不俚」を退けて、「質」の一面を鋭く突き出すものとしての「俚」を採り上げたのである。「質にして俚ならず」という觀念は、すでに「史記」を越えて、廣く文學の理念とまでなっていた。それを否定することは、たとえ部分的ではあっても、紛れもなく新しい文學觀の提起であった。袁枚も「隨園詩話」(卷三)で、

元白在唐朝、所以能獨竪一幟者、正爲其不襲盛唐窠臼也。

と述べていた。かくて「沈雄渾厚」の詩歌に、白居易は訣別して行ったのである。のみならず、趙翼が語るように、韓愈や孟郊の「奇警」の文學にも背をむけ、「坦易」への道を拓き、ついに一つの樣式として見事に充實させたのである。

白居易は「俚」を避けなかった。むしろ積極的に吸收しようとしていた。やがてその文學は、彭乘によって「鄙俚に近し」と考えられた。この「鄙俚に近し」を、李東陽は「遂に淺俗に失す」と改めていた。白居易が、當時行われていた「澁僻」な詩風を、一變しようと意圖して、こ



とさらに、對象的な立場をとった、と主張する便宜のためである。この李東陽の語を、俞弁はひきつつ、「淺俗」を改めて「粗俗」としていた。白居易を辯護しようとして、嫗解のことを否定し易くするため、李東陽の發言を、より抵抗感のあるものにする必要があったからである。「俚」が變じて「淺俗」や「粗俗」となったのは、「俚」の中にある價値低い一面が、鋭い形で取り出されたことである。それを可能にしたのは、ほかならぬあの蘇軾の「白俗」という語である。もし蘇軾に從って、白居易の文學を「俗」と規定するならば、必ず見逃すものがでてくるであろう。もともと白居易は「俗」を課題としていたのではないからである。清の潘德輿は「養一齋詩話」(卷一)で、

滄浪論詩、「先去五俗」。朱子亦曰、「須先識得古今體制、雅俗嚮背」。此入門第一義。白不盡俗、白如盡俗、何以不朽。俗蓋必朽者也。

と記していた。「五俗」とは、宋の嚴羽の「滄浪詩話」に述べられている、「俗體・俗意・俗句・俗字・俗韻」である。この「俗」なるものを見極めて棄て去るよう、と朱熹も勸めていた。しかし白居易は「俗」なるものに徹していたのではない。「俗」でありきるならば、すでに亡んでいたからである。潘德輿はこのように述べ、白居易を「俗」と規定することに抗議しているのである。まこと、白居易の文學は、「俗」で割り切り得るものではない。潘德輿にならって言えば、「俗」でありきるならば、あのように數限りない人々から愛賞されることはあり得ないからである。それまで、素朴な民間歌謠しか知らなかった民衆が、白居易の詩歌に心魅せられたのは、そこに高い知識と豐かな教養を背景にする文學を感じたからである。田雯は「古歡堂集」(雜著卷二)で、白居易に

ついて、

名言妙句、側見横出、淺淡精潔之至。

と述べていたが、その「淺淡にして精潔」な言語構成は、人々に喜びを與えていた。たとえば、先に言及した「玉容　寂寞として涙　闌干、梨花一枝　春　雨を帶ぶ。」について、これを非難する周芝之も、「人、皆其の工を喜ぶ。」と認めていたのである。しかもその「人」は詩歌を創作する階層とは限られない。宋代以後の「平話」類、「五代史平話」などにしばしば用いられているからである。そしてそのまま、趙翼の言葉を借りれば、「人の共に言わんと欲する所を言う」ものとして、多くの人々に共感されたのである。その趣きの一面は、先に掲げた元稹の「白氏長慶集の序」における、「王公・妾婦・牛童・馬走の口、道わざるはなし。」という語によつても知られるであろう。これらの人々が口にしたのは、元稹によれば「秦中吟・賀雨・諷諭等の篇」であり、劉熙載によれば「匹夫匹婦に代るの語」であつたからである。しかも、潘德輿が「養一齋詩話」（巻一〇）で

白詩雖時傷淺率、而其中實有得於古人作詩之本旨、足以扶人識力、養人性天。

と述べるように、廣く言つて、ものの見方や感じ方などを、人々に新しく眼開かせたのである。宋の樓鑰は「攻媿集」（巻七六）の「白樂天集の目錄に跋す」で、

留侯之在漢、無敢訾之者。「四皓廟」詩云、「終雖覇者道、徒稱帝者師。子房爾則能、此非吾所宜」。立論至此、尤爲高勝。

と述べる。それまでの張良に對する見解とは異つた、斬新な見解と指摘するのである。この一文で樓鑰は、

詞意曠達、有古人所不易到、後來不可及者、未容悉數。

とも述べ、二三を例示していた。「攻媿集」の前後から、詩歌や句法について、「最も新なり」、「未だ人の道うを經ず」、あるいは「他人、道う能わず」などの評がしばしば下されているが、識見を誇る者でさえも、白居易の獨創的な見方や感じ方を、讃えるにやぶさかではなかつた。多くの人々にとつて、時に自然への見方を細やかにし、時に人生の悲しみや喜びを深め、さらには人間や社會の在り方さえも、考えさせたことは少くなかつたであろう。趙翼が「自から能く人の心脾に泌み、人の咀嚼に耐う。」と述べていたのも、このようなことと理解すべきであり、葉燮が「俚俗の處にして雅もまた其の中に在り。」という、その「雅」もこれらの點を指すのであろう。

ここから顧みれば、蘇軾の「白俗」の發言は、責められなくてはならなくなる。早くも南宋で、張鎡は、「南湖集」で、「戲れに樂天の體に效う」（巻一）などを作りつつ、「樂天の詩を讀む」（巻四）という一作において、白居易の詩歌を、かつて劉禹錫が用いた「斤斲の痕迹なし」という語をふまえて評しつつ、

隨人稱白俗　眞是小兒言

と言い放つていた。蘇軾の「白俗」のみならず、この語をめぐつて派生した「鄙俚」とか「卑陋」とかの見解をも、きびしく咎めているのである。清代に例を求めると、趙翼の「俗を以つて之を訾るは、此れ詩を知らざる者」という見解を承けて、愛親覺羅恒仁に蘇軾を責める文字がある。

「夷白齋詩話」載元釋溥光二絶句、稱其奇拔、恨不多見。其詩卽樂天「蟭螟殺敵蚊巢上」、「豆苗鹿嚼解烏毒」二首也。此公未讀「長慶集」、必平日不喜白體者。固知東坡誅友之語、貽害後人不淺。

「月山詩話」の一節である。白居易の詩というのは、「禽蟲十二章」（3661～3672）の第七と第十である。それを白居易の作と知らずして讃えるのは、「白氏長慶集」を讀まなかつた爲と譏り、そのような風潮を導き出したのは、「白俗」の語であるとして、蘇軾を非難しているのである。當時、「白氏文集」を避ける傾向が一部にあつた。翁方綱の「石洲詩話」（卷二）に、王士禎が「神韻を標し」、「初學の人」が輕がるしく「長慶集」を看ることを戒めたと、記されるのが、このことを示すであろう。しかし、袁枚は「隨園詩話」（卷一）で、「何ぞ見る所の狹きや。」と、王士禎を批判していた。「月山詩話」は、趙翼とともに、一部の徒をも誡めたのである。

蘇軾は白居易の生き方に共鳴し、その詩歌を好んで讀み、影響も少なからず受けていた。ただ柳瑾の死を悼むあまり、意を以つて「白俗」の語を打ち出した。この發言は、蘇軾の後代に對する、文學的影響の大きさによつて、軾の豫想し得ぬ、さまざまな波紋を、文學評論の上に卷き起した。しかし、白居易の文學への誤解さえも、時に導き出す危險を孕んでいる以上、もはや忘れ去るべきものであろう。

附記　白居易・元稹・李白の詩文の下に記した數字は、それぞれの作品番號であり、白氏については拙著「白氏文集の批判的研究」、元氏については拙著「元稹作品表」、李氏については拙著「李白歌詩索引」において設定したものである。杜甫の作品番號は Harvard-Yenching Iinstitute の「杜詩引得」による。